

死に向かう

ADAGIO——APPROACHING TO DEATH

アダージョ

DEATH BRINGS NEW MEANING TO LOVE

小池真理子

死に向かう

ADAGIO——APPROACHING TO DEATH

アダージョ

DEATH BRINGS NEW MEANING TO LOVE

小池真理子

死に向かうアダージョ

著者―小池真理子 発行者―井上功夫

発行所―株式会社双葉社 東京都新宿区東五軒町三―二八 郵便番号 一六二

電話・東京 (〇三) 五二六一―四八一八 (営業)

(〇三) 五二六一―四八三三 (編集)

振替・〇〇一八〇―六一七二九九

印刷所―株式会社享有堂印刷 製本所―株式会社若林製本工場

落丁・乱丁の場合は本社にてお取りかえいたします。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

©小池真理子 一九九四年 Printed in Japan

死に向かうアタッシュ

装帧

コガワミチヒロ

序

男には妻がいた。妻は男よりも十四歳年上だった。妻に対して、男はどうしても別れ話を切り出すことができなかった。かといって、恋人と別れることもできなかった。

もしふたりの心中が新聞のニュース種になったとしたら、わずか数行で片づけられていただろう。「三角関係の清算」という親切な小見出しつきで。

しかし、彼らは自分たちの死後、世間が自分たちのことをどのように受け止めるのか、ということについては、徹底して無関心だった。彼らは彼らの死に向かって、ただひたすら、まっしぐらに突き進んだだけだった。

そこには快い陶醉があった。甘美な充足感があった。彼らはその陶醉を分かち合い、自分たちが作り出した繭の中に身をひそめながら、ひっそりと準備を進めた。

心中の動機は、確かに三角関係の清算だったが、そればかりではなかった。死を意識し、死に向けて手をつなぎ合った途端、彼らは愚かにも、死そのものに魅せられてしまったのである。残されることになる人々の気持ちを斟酌することもなく、彼らは死を前にして、驕る勇者の気分浸っていたのである。

一九九三年十二月二十四日。ふたりは、クリスマス気分で賑わう東京をあとにした。死に場所はあらかじめ決めてあり、死に方も死後の問題処理もすべて解決済みだった。

幸福という言葉を使うことができるなら、まさに彼らは幸福の絶頂にいたと言える。その幸福が、どんな災いを招くことになるのか、つゆとも知らずに。

万座温泉スキー場を西に折れ、黒湯山、御飯岳などを眺めながらしばらく走ると、姫夜叉峠が現れた。峠は群馬県と長野県の県境に位置しており、二千メートル級の山である破風岳の、七合目地点に相当していた。

さきほどまで時折、雲間から太陽が顔を覗かせていたのだが、今は空全体が重苦しい灰色の雲で被われている。風はなかったが、急激に気温が下がったのだらう、ヒーターで暖まったフロントガラスの一部は、水蒸気でうっすらと曇り始めている。

万座温泉までのハイウェイは除雪されており、おまけにここ二、三日、晴天続きだったらしく、路面は完全に乾いていた。万座から姫夜叉峠に至る道には、いくらか雪が溶けずに残っていたものの、路肩に溜まっている程度で、運転に支障はなかった。

だが、ふたりが辿り着いた姫夜叉峠から右に伸びている細い林道は別だった。ところどころ、雪がなめらかな白い鏡のように見える凍結部分を作り出している。しばらく前に降り積もった雪が、そのまま凍りついたものらしい。

二宮多門は峠の駐車場に車を止め、手早くタイヤチェーンを装着し始めた。これから死のうとしている自分たちに、何故、いままらタイヤチェーンが必要なのか、考えてみると可笑しかったが、早川千尋はそのことについては何も言わなかった。自分たちの死は、ひとつの厳粛な儀式であるべきだった。目指す山小屋に辿り着き、計画通り実行に移すまでは、むやみと危険を冒すようなまねはしたくなかった。

手伝おうか、と千尋が窓から顔を出して言うと、多門は微笑みながら、首を横に振った。「すぐに済むよ」

多門の顔は本当に日本人そのものだ。面長な顔に一重まぶたの切れ長の目。真っ黒で濡れているように見えるふさふさした髪の毛。いつだったか、彼の子供のころの写真を見せてもらったことがある。モンゴルの遊牧民の子みたいだろ、と多門は言い、以来、千尋はモンゴル人が好きになった。

決して人目をひく派手な顔立ちではなかったが、かといって人ごみにまぎれて見分けがつかなくなるほど地味でもない。陰と陽とがまざりあい、ナイーブさと頑固さが同居している。そんな顔だ。

チェーン装着が終わると、多門は泥で汚れた両手を千尋が手渡したタオルで拭き、鼻をすすり上げた。「さすがに寒いな」

千尋はうなずき、多門を見つめた。ずっと多門を見ていたかった。目の中に焼きつけて、焼きつけたまま死んでいったかった。

再び運転席に戻った多門は、注意深い運転で峠の道に入った。未舗装の道で、よほど路面が固く凍りついているのか、チェーンを巻いたタイヤががりと音をたてる。

行き先は、今でこそ廃屋になっているが、かつてはハイキング客や登山客に親しまれていた「へじんぺい小屋」という山小屋だった。小屋は、般若川（はんげがわ）という川に沿って続く峠の道の中に建っている。

地図上では、長野県須坂市まではわずかの距離なのだが、市内に出るためには、再び姫夜叉峠に戻って、ぐるりと迂回し、別の道に入らなければならない。小屋の先にあるものと言ったら、夏場にハイカーたちで賑わう、初心者用のゆるやかな登山道ばかりである。

道は冬枯れの寂しい山を縫うようにして伸びており、あたりには何ひとつ建物は見当たらなかった。あとわずか、このあたり一帯も雪に埋もれてしまう。自分たちの死体もしばらくの間は発見されな

いだろう。そう思うと、千尋は虚しい喜びに包まれた。

へじんぺい小屋は、夏場のハイカー向けの宿泊施設として建てられた。主人の加山甚平は山好きの男で、真冬を除く春夏秋冬、年のうち四分の三は、この地で生計をたてていたという。

加山甚平は、多門の学生時代からの友人だった。千尋も何度か、多門を交えて会ったことがある。

山男だと聞かされていたから、髭づらでなくましい、Ｌサイズの汚れたワークシャツが似合う男を想像していたのだが、会ってみると、甚平はぬいぐるみの小さな熊を思わせる親しみやすい小柄な男だった。

二年前、甚平と一緒に小屋の運営にあたっていた山仲間が、沢で足をすべらせ、大腿部を骨折したのをきっかけに、甚平はあっさり小屋をたたんでしまった。その後、東京に戻ってすぐに見合い結婚をし、杉並区松庵で両親ともども二世帯住宅に住みながら、毎朝、ネクタイをしめて新宿のオフィスに通動している。

切り替えの早いやつだよな、と多門は千尋に言ったものだ。彼は現在がすべてなんだよ。今はもう、山で暮らしていたことすら忘れてる。

そういう人って羨ましい、と千尋は応じた。そんなふういろんなものを背負いこまずに生きていけたら、幸せでしょうね。

そう思うよ、と多門も言った。

姫夜叉峠から二十分ほど車を走らせると、葉を落として寒そうに震えている木々のはざまに、うらぶれた木造の建物が見えてきた。まるで、うち捨てられた大きな積木の箱のようだ。細い丸太を組んだログハウスふうの作りだが、ログハウスというよりは、簡易に建てられた作業小屋と呼ぶほうがふさわしい。一目で素人が作ったものと思われる生木の柵囲いが、半ば倒れかかりながらも、小屋に

向かって点々と連なっている。多門はハンドルをゆっくりと右に切り、柵囲いに沿って車を進めた。タイヤが凍てついた枯れ葉の上を踏んでいく。

「雪だ」多門がフロントガラスを見つめたままつぶやいた。ヒーターで暖まったフロントガラスに、はらりと雪のかけらが舞いおりて、瞬時のうちに溶け去っていくのが見えた。

胸が詰まる思いにかられながら、千尋はガラス越しに空を見上げた。灰色の雪空は妙に明るく、静かだった。

小屋の入口から少し離れた、奥まったスペースに車を停めた。そこなら、林道から車を見咎められる心配はない。

多門はエンジンを切った。静寂がふたりを包みこんだ。ふたりは束の間、目を見交わし合うと、何も言わずにそれぞれ、ドアを開けて外に出た。

多門は小屋を見渡し、ブルゾンのポケットをまさぐって、鍵を取り出した。小屋の入口の鍵だった。多門が甚平から借り出したものだが、その時、甚平に向かって彼がどんな言い訳をしたのか、千尋は知らない。知りたいとも思わなかった。小屋の鍵が持主の手に戻る時、すでに自分たちは死んでいる。そう思うと、知っておかなければならないことなど何ひとつないような気がしてくる。

千尋は加山甚平あてに遺書を書いた。自分たちが甚平の小屋を死に場所に選んだことに対する、せめてもの詫びの手紙だった。

廃屋と化したとはいえ、山小屋の所有権は今も甚平にある。お気持ちが悪いでしょうから、私たちの死体が見つかったらすぐに、小屋を解体してください、と最後に結んだ。解体のための費用は、実家の親に支払われる自分の生命保険金を充ててほしいと明記し、親への連絡方法も忘れずに書き添えた。

多門が車のトランクルームを開け、荷物を取り出し始めた。荷物といっても大したものはない。小さなポストンバッグが一つ。古めかしいラジカセが一つ。あとは紙袋だ。

紙袋の中には、ミネラルウォーターのペットボトルが二本と、赤ワインが二本、蠟燭、懐中電灯、ビニールシート、ウェットティッシュのケース、新聞紙、何本ものナイロンひもをより合わせて作った太いロープなどが詰めこまれている。

ポストンバッグは千尋のものだった。中にはきれいに磨きあげたグラス、香料入りのティッシュペーパー、タオル数枚、最後の晚餐用のコンビーフの缶詰とクラッカーの箱、小皿、ナイフ、フォーク、そして、三通の遺書が入っている。多門を手伝ってポストンバッグを手にし、千尋は小屋の扉の前に立った。《じんべい小屋》と墨文字で書かれた薄い木札が、扉の脇に錆びた釘で打ちつけられたままになっている。雨ざらしになっていたためか、文字の大半が流れ始め、恐怖映画のタイトル文字のように黒い雫となってだらりと伸びている。

多門がおし黙ったまま、扉の鍵穴に鍵をさしこんだ。ぎい、と湿った音をたてて扉が内側に開いた。中の空気は淀んでいたが、微の匂いもしなかった。かろうじて嗅ぎ分けられたのは、埃くさくなった材木の匂いだけだった。

土間になっている玄関から、靴のまま板の間に上がりこんだ。玄関の先は、間仕切りのない広間だった。中央に大きな薪ストーブが一つ。右端に、石を積んだだけの簡素な暖炉がある。暖炉の脇には、使い残された薪の束が山のように積まれてある。

天井には何本かの黒々とした梁が渡されている。床一面に、うっすらと白い埃が積もり、あちらこちらに干からびた虫の死体が転がっている。梁という梁、窓という窓には大きな蜘蛛の巣がかかっている。

広間の奥に、梯子のような粗雑な造りの階段があり、その上に中二階が広がっていた。個室は確か、三つしかなかったはずだ、と多門が言っていたが、その通りだった。個室といっても、まるで木賃宿の蚕棚のように、寢床のスペースが三つ、横に並んでいるだけで、しかも広間から丸見えになっている。山好きの人間が見ず知らずの仲間とうちとけ合い、飲んだり食べたり歌ったりしながら長い夜を雑魚寝して過ごすには、まさにうってつけの構造と言えた。

ふたりは荷物を床に置くと、申し合わせたように動き出した。多門は薪ストーブの蓋を開け、煤の具合や煙突の様子などを調べてから、火をおこす準備を始めた。千尋は持って来たウェットティッシュを使って、丹念に床の一部と窓とを拭き清めた。

室内に残されていた薪は少し湿っており、なかなか火がまわらない。多門が外から小枝を拾って来た。持参した新聞紙に火をつけ、小枝を燃やす。

何度かの失敗のあと、やっと薪が燃え始めた。薪のはぜる音が室内に響きわたった。手足の先がしびれるほど冷たくなっている。ほんのりと暖まり始めた空気は、なおさら寒さを感じさせる。

千尋はストーブのそばに、ピクニック用の青いビニールシートを敷いた。ボストンバッグを開き、グラスを二つ取り出して、シートの上に並べる。きれいなランチョンマットも持って来ればよかった、とちらりと思った。そうすれば、少しは華やいだ演出ができたかもしれない。

ストーブのそばに立ったまま、じっと千尋のすることを眺めていた多門は、寒くないか、と彼女に聞いた。大丈夫、と千尋は答えた。ふたりの声が、がらんとした室内にこだました。

多門が赤ワインのボトルをグラスのそばに置き、千尋は持参したコンビーフの缶詰とクラッカーの箱を取り出した。

少し物を食べた方がいい、と言ったのは多門だった。まず千尋が睡眠薬入りのワインを飲み、眠り

におちたところを見計らって、多門はあたりを片づけ、彼女の首を絞める。千尋の死を確認したら、多門は天井の梁にロープを結び、首を括る——それが段取りだった。だから、睡眠薬入りのワインを飲むのは千尋だけ。もしも薬の効き目が弱くて、いつまでも眠れなかったらどうしよう、と不安を訴えた千尋に、多門はクラッカーか何かを食べてから薬を飲めばいい、と教えた。

いくらかの固形物が胃に入っていたほうが、薬の消化吸収も早くなる、というのが多門の意見で、千尋もその意見に同調した。ふたりの最後の晚餐になるのだから、とコンビーフの缶詰も用意した。とてもそんなものを食べる心境ではないのだが、あればあったで、最後の食卓が少しは賑やかになるはずだった。

一人住まいのマンションから持ち出して来た小皿とナイフ、それにフォークも並べる。ナイフとフォークは銀製で、千尋がモデルの仕事をしている先の西洋画家、青砥貞二郎画伯から贈られたものだった。柄の部分に、画伯が業者注文して彫らせた「C」のイニシャルが入っており、それを見るなり、千尋は東京で青砥宛てに投函してきた手紙を思い出した。

青砥画伯は妻の治子と共に、昨日からイタリアに向けて出発している。帰国予定は年明けの一月十四日。それまでに自分たちの遺体が偶然、誰かに発見されることはまず考えられないから、おそらく、他の誰よりも早く、千尋の遺書を目にするようになるのは、青砥画伯になるはずであった。

画家とモデルという立場の違いこそあれ、静謐な絵画の世界を共有し続けてきた青砥画伯に、そうした形で衝撃を与えることになるのは気がすまなかった。だが、かといって、画伯に黙ったままでいたら、かえって心配をかけることになりかねない。

アトリエでのモデルの仕事は、毎週木曜日と決まっていた。年末年始は休みになるが、年明けの初仕事は、画伯が帰国した翌週の木曜日になる予定だった。当日、千尋がアトリエに現れなかったら、

画伯夫妻は不審に思うに違いなかった。モデルの仕事をし続けて九年。ただの一度も、連絡せずに休んだことなどなかったからだ。

黙って行方知れずになり、いたずらに犯罪の匂いを漂わせたりするよりも、はっきり死の意志を伝えたほうが画伯にかける迷惑は少なくなる。そう思った。

とはいえ、当然のことながら、手紙の中に〈へじんぺい小屋〉の名は書き記してはいない。何かの偶然が重なって、画伯がこの小屋を探し出すことになったとしても、それがいつになるのか、見当もつかない。来年の春か。それとも夏か。あるいは、画伯は永遠にこの場所を見つけられずに終わるのかもしれない。

それならそれでかまわない、と千尋は思う。いずれ、そう遠くない将来、この小屋も解体されることになるだろう。自分たちの遺体を発見するのは、解体業者だ。その時はすでに、小屋に残した数通の遺書はねずみに食い荒らされ、風化し、痕跡すらとどめていないのかもしれない。いずれにせよ、あれこれ死後のことを案じていても、もはや、どうにもならないのだ。

「座ってみて」と千尋はビニールシートに座ったまま、自分の横を指差した。「どんな感じ？」
多門ははいていたブーツを脱ぎ、ビニールシートの上に正座した。「いいよ、とっても」

「おままごとをしてるみたいね」
「それにしちゃ、本人たちがちょっとマセすぎてるな」

ふたりは正座したまま、向き合って微笑み合った。だが、笑みはまもなく凍りついた。多門が唇をわずかに震わせた。彼の小鼻がひくりと動いた。薪が大きな音をたててはぜた。次の瞬間、千尋は多門の両腕の中にいた。

「どうして泣くの？」千尋は多門の革のブルゾンに顔をおしつけたまま聞いた。「泣かないでよ。お

願い」

多門は応えなかった。背中を大きく波うたせたまま、千尋を抱きしめ、千尋の髪の毛に顔を埋めて嗚咽をこらえている。

千尋は歯をくいしばった。泣くのはいやだった。今、泣き出したら、とめどなく涙があふれ、多門が見えなくなってしまう。多門の声が聞こえなくなってしまう。

そっと顔を上げ、多門の様子を窺った。彼は同じ姿勢のまま、じっとしていたが、やがて怒ってでもいるかのような仕草で彼女から身体を離れた。拭いたばかりの窓ガラスの向こうに、音もなく舞い落ちてくる雪が見えた。

多門は再びブーツをはいた。そして、ゆっくりした足取りで窓辺まで行くと、やおら、ガラスに両手をあてがった。独房の壁に張りついている死刑囚のようだった。

千尋は死ぬことは怖くはなかった。多門の手にかかって死んでいけると思うと、ただひたすら嬉しかった。もはや、悲しみも絶望も過去のものでしかない。むしろ、死んでいくことにかすかな期待すら覚える。

早川千尋。二十九歳。彼女は、決して不幸な日々を送ってきたわけではない。

生まれは宮城県仙台市。父は公務員で、母は小学校の教師だった。二つ年下の弟は公立大学の教育学部を出て、現在、福島にある私立の女子高校で教鞭をとっている。四つ年下の妹は相変わらず両親と同居しながら、家事にいそしみ、年季の入った主婦のように、つつがなく近所づきあいをこなしている。

千尋をふくめて、早川家の子供たちが両親から与えられてきた愛情は人並み以上だった。千尋自身、そのことを疑ったことは一度もない。母親は子供たちのために、雛祭のごちそうを作り、クリスマス

にはチキンを焼いて、模造品のモミの木を飾りたてた。父親は端午の節句の時期になると、軒先にさやかな鯉のぼりを立て、四匹並べた鯉のうち、一番大きいのがお父さんだ、と子供じみた声で自慢した。

町内の子供会の役員になり、夏休みに公園で近所の子供たちを集め、ラジオ体操を指導していたのは父親だったし、母親は花見会だの芋煮会だの、人が面倒がるようなことを率先して計画し、自分の教え子もまじえて、千尋たちを外に連れ出すのが好きだった。

前向きで健全で善意の人、というのが千尋が知っている両親の姿だった。とはいえ、言い方を変えれば、彼らは途方もなく世俗的な人間だった、と言うこともできる。

両親はめったなことでは子供たちを叱らなかったが、たまに叱ることがあるとすれば、それは子供たちのうちの誰かが、世間から孤立するような行動をとった時に限られた。

子供会で夏休みに盆踊り大会をやることになれば、参加しなければならない。みんなで何かをすることになった時は、喜んで協力しなければならない。遊びであろうが、行事であろうが、勉強であろうが、だ。

みんなで決めたこと、世間で善いことだと信じられていることに疑問をさしはさもうとすると、両親は間違いなく子供たちをきつく叱った。「みんなで仲良く」……それが両親の一貫した教育方針だった。

昔、TVのドキュメンタリー番組で、千尋は「はぐれ猿」を見たことがある。仲間からはぐれ、一頭だけで生活している孤独な猿の映像だ。何が原因だったのか、猿には稀れにそうした習性があるものなのか、画面に映し出された猿は、仲間を振りかえりもせず、哀れな、それでいて頑なな目をして、鬱蒼とした森の奥深く、移動していく。

見ていて千尋は、私と同じだ、と思った。はぐれることを求めているわけではない。なのに、どうしようもなく、仲間から、家族から、社会からはぐれてしまう。そのうち、次第に感覚が麻痺してくる。喜怒哀楽の情が希薄になる。過剰にふくらむ自意識以外、何ひとつ感じなくなってくる。

だが、そんな状態に慣れてしまえば、どうということはなかった。そんなものだ、と納得できれば、それなりに気が楽になった。

高校を卒業し、どうしても家族から離れたかったので、東京にある私立の美術大学に進学した。昔から絵を描くことが好きだった。絵を描いている時だけ、自分をその場所につなぎとめている虫ピンのようなものから解き放たれ、別の空間を自由に泳いでいるような錯覚を味わえるからだだった。

青砥貞二郎画伯を知ったのは、二十歳の時。美術館でたまたま目にした画伯の絵に惚れこみ、失礼を承知で、鎌倉の画伯の自宅を訪ねた。

千尋が通っていた美大で教えていたことがあったせいか、画伯は、気軽に会ってくれた。世間話の合間に、絵のモデルを探している、と画伯に言われ、何ら深い考えもなしに、だったら私を使ってみてください、と申し出た。裸婦でもかまわないのか、と聞かれたが、即座に、もちろん、かまいません、と答えた。

試験的にモデルの仕事をしてみることに話がまとまった。画伯の前で裸身をさらしていると、俗世を忘れられるようで気分がよかった。画伯はあくまでも上品な紳士だった。その真剣なまなざしが裸の身体のおちこちに注がれ始めると、臆するどころか、鎖を解き放たれた獣のような気分になった。

モデルとして決して完璧とは言いがたい、肩のはった、がっしりとした身体つきも、いつしかそっくりそのまま、何の嘘いっわりもなく、画伯の手でキャンバスに塗りこめられていくのだろう。そう思うと、千尋は自分が生身の人間であることを忘れ去った。彼女は、ただのオブジェと化して、大胆